

# フィンランドの小学校英語教科書に描かれる異文化 —— 日本の小学校外国語活動に向けて ——

渡 部 孝 子

## **An Analysis of English Textbooks for Primary Schools in Finland from Intercultural Understandings** —— Towards Foreign Language Activities in Japan ——

Takako WATANABE

# フィンランドの小学校英語教科書に描かれる異文化

——日本の小学校外国語活動に向けて——

渡部 孝子

英語教育講座

(2008年10月1日受理)

## An Analysis of English Textbooks for Primary Schools in Finland from Intercultural Understandings

——Towards Foreign Language Activities in Japan——

Takako WATANABE

Department of English

(Accepted on October 1st, 2008)

Finland was in the best top four, for TOEFL (Test of English as a Foreign Language) in 2004-5. It is, therefore, obvious that their educational standard is very high. MEXT (Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology) will introduce “Foreign Language (English) Activities” at primary schools from 2011. “Foreign Language Activities” will have a mission to explore pupils’ International Understandings. However, how do Japanese primary school teachers teach “International Understandings”?

The purpose of this study is to analyze English textbooks for primary schools in Finland. First of all, *National Core Curriculum for Basic Education 2004* is shown. It tells us Finland set objectives of three criteria for learning a foreign language; Language proficiency, Cultural skills and Learning strategies. Then the series of English textbooks, *Wow!* by WSOY are analyzed. It is examined how different cultures are described in the textbooks. Findings suggest that the cultural contents and skills are chosen and edited in a completely student-centered approach. Also it seems that the textbooks are designed to make pupils acquire “global literacy” by the end of the grade 6. This throws us a crucial task to make careful planning for what and how to teach different cultures through Foreign Language Activities.

### 1. はじめに

今や世界中がフィンランドの教育に注目しているといっても過言ではない。現在世界中の教育関係者がフィンランドへと視察目的に押しかけている。特にヘルシンキ市内の学校では、視察の対応に追われ落ちていて授業が行えないため、視察の制限を行っているところが多いと聞く<sup>(1)</sup>。こういった状況が生

み出された背景として、フィンランドの教育水準の高さが PISA (Programme for International Students Assessment)<sup>(2)</sup> の調査で示されたことが挙げられる。

子ども達の学力について国際比較をする妥当性があるのか、また PISA の問題設定や測定の方法の妥当性や信頼性はどうかといった議論は、これからさらに深まっていくだろう。各国の教授内容、教授法の背景には国独自の理念や宗教、歴史観など

様々な要素が複雑に絡み合っている。従って、PISAの結果そのものが子ども達の学力や知力の全てを測定するものではないと考えるのが賢明だろう。とはいえ、PISAで高得点を得る手がかりを模索するため、フィンランドの教育政策や教育実践が調査対象となるのは当然かもしれない。

では、英語教育についてはどうだろうか。PISAではこれまで外国語能力の調査は行われていない。そこで、世界的に認知されているTOEFL (Test of English as a Foreign Language) の結果を例に取ってみよう。フィンランドの英語教育は世界の中でトップレベルであり、2004年-2005年度のTOEFL-CBT (Test of English as a Foreign Language-Computer Based Test) の成績は世界で4番目に高い257点(300点満点)であった。一方、日本の受験者の平均は191点でアジア29カ国・地域の中で28番目の成績であった<sup>(3)</sup>。

フィンランド語は英語に近い言語ではない。フィンランド語はウラル語族に属しており、日本語と同じ膠着語<sup>(4)</sup>である。表記はラテン文字を使用し、綴りと発音がほぼ一致している。またアクセントは常に第一音節に置かれるという特徴があり、インド・ヨーロッパ語族の英語とはかなり異なる言語である。従って、フィンランド語の言語的特徴だけを見ると、フィンランド人が高い英語能力を容易に獲得できるという要素は見あたらない。

では、なぜフィンランド人は英語能力が高いのだろうか。それには、「言語学習」に対する国の教育政策が大きく影響していると言えるだろう。まず、フィンランドはフィンランド語とスウェーデン語を公用語とする二国語国家である。実際にスウェーデン語を母語とするものはフィンランドの学習指導要領では、基礎学校<sup>(5)</sup>3年生から外国語(ほとんどの児童は英語を選択する)を必修とし、7年生でフィンランド語を国語として学んできた児童は公用語であるスウェーデン語を、スウェーデン語を国語として学んできた児童はフィンランド語を必修科目として学習することになっている。フィンランドの人口520万人のうち、スウェーデン語の母語話者は約6%と言われている。スウェーデン統治下600年以上の歴史と、

スウェーデン語の地位確立に関する歴史的背景があったとはいえ、鏡味(1991)が指摘しているように6%の人々のために公用語がフィンランド語と等しく保障されていることは驚きである。

さらに、フィンランドの英語教育をトップレベルにしている背景には、EU加盟国が共有している教育理念や政策も影響を与えているだろう。EUは、多様性の中の統合(United in Diversity)という基本理念を示し、EUでは全ての市民が母語に加えて少なくとも2つ以上の言語を用いてコミュニケーションが図れるようになることを目標としている(駐日欧州委員会代表部 2005)。

フィンランドは内国語教育と共にEU加盟国として外国語教育、特に英語教育に力を注いでいる。では、基礎学校において一体どのような英語教育が行われているのだろうか。日本の小学校外国語活動に学ぶものはないだろうか。

## 2. 研究の目的と手法

日本では学習指導要領の改訂で2011年より小学校5年生から「外国語活動」(原則は英語)が週1時間導入されることになった。しかし「外国語活動」は「教科」という扱いではない。また「総合的な学習」の時間も継続されることになり、ここでも「外国語活動」で学んだことを活かした国際理解教育が求められている。

新学習指導要領<sup>(6)</sup>では「外国語活動の目標」として、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」としている。文化に関する内容として「日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと」とある。つまり、自文化に対して「異文化」をどのように理解するかという「異文化理解」という方向付けがされている。

また外国語活動を通して、英語のコミュニケーション能力の素地を養うとしながらも、音声による

コミュニケーション中心とし、アルファベットの文字や単語はあくまで補助的に用いるように指示されている。従って、日本の文部科学省は、「外国語活動」を通して「異言語」や「異文化」に接することで興味・関心を高めようという点に重きを置いており、言語学習の定着までは求めていないことがわかる。

また、外国語活動は教科ではないため、教科書がない。教育現場の混乱を避け、学習項目の基本を示すため教材として『英語ノート』が2009年度から全国で配布される予定である。2008年度に一部配布された『英語ノート（試作版）』では、文字情報がほとんどなく、各課のテーマに即した題材が絵で提示されている。

あまりにも教育環境が異なるため、日本とフィンランドの小学校英語教育を比較すること自体には意味がないかもしれない。しかし英語教育を通した「異文化理解」のアプローチを学ぶことは、日本の外国語活動に応用できるのではないかと考えた。そこで本研究では、フィンランドの基礎教育3年生から6年生の期間、どのような英語学習の目標が掲げられているのか、教科書に描写される「異文化」とはどのようなものかを分析する。そして分析結果から、フィンランド型の異文化理解へのアプローチを提示し、日本の小学校外国語活動が目指す「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める」ためのアプローチを考えていくことにした。

研究の手法は、フィンランドの学習指導要領と教科書分析を中心に、全国で70%のシェアを誇る教科書出版会社WSOYにて聞き取り調査を実施（2007年10月9日）した結果を合わせて分析していくことにする。

### 3. フィンランドの小学校英語教育について

本節ではまず、フィンランドの義務教育における外国語教育の状況及び、学習指導要領に示されている小学校英語科教育の目標と内容について概観する。

#### 3-1 基礎学校における外国語教育について

フィンランドでは7歳から15歳までの9年間を義務教育期間とし、一貫した基礎教育を行っている。外国語は基礎科目の一つで、文化を理解し、言語技能を養う教科であるとされている。外国語は3年生から必修になるが、学校によっては1年生から導入しているところもある。

フィンランドにおいては、2004年に改訂された『National Core Curriculum for Basic Education 2004』<sup>7)</sup>が日本の学習指導要領にあたる。これは国家教育委員会によって作成され、それに基づき各学校が独自に授業実践を行っている。この学習指導要領及び吉田（2007）によると、基礎学校1年生から外国語学習は認められている。基礎学校3年次には外国語学習が必修となり、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語から一つ選択して学ぶことになる。これらはA1言語と呼ばれている。ただし、内国語であるスウェーデン語（非母語話者対象）かフィンランド語（非母語話者対象）をA1言語として学ぶこともできる。実際は90%程度の児童がA1として英語を学習している。とはいえ、フィンランドの基礎学校では、6年次までに選択科目としてA2言語の学習が可能であること、7年次からはB1言語として内国語としてスウェーデン語かフィンランド語が必修となること、さらに選択科目としてB2言語の学習も可能になる。つまり、児童・生徒には言語学習の機会が様々な段階で設定されているのである。

#### 3-2 学習指導要領における「外国語」の目標と内容

フィンランドの学習指導要領の第7章5節に「外国語」という項目が設けられている。学習指導要領には、選択科目として1年生から外国語を導入した場合に対応するための内容を示しているが、ほとんどの学校では必修となる3年生から「外国語」を導入している。

##### <1－2年生>

中心となるのは、理解力を養う、繰り返し練習、聞いたことに対応する、口頭練習を行うことである。場合に応じ、口頭練習に必要であれば書く学習を用

いる。児童が経験することや既習の内容とテーマを統合させるような指導を行う。異文化への基礎的な導入を児童に与える。指導は基本的に機能的且つ活動的なものとする。

目 標：児童は以下のことが期待される。

- ・言語とその意味を意識する。
- ・聞いて理解した単語やフレーズを話したいと感じる。
- ・基本的な言語学習能力、そして結果として言語学習を習得する。
- ・言語学習や様々な文化の生活に興味を持つ。

基礎内容：

- ・日常生活、現在の環境・家庭・学校。
- ・年齢に適した歌、ナーサリー・ライム、ゲーム。
- ・目標言語の文化や地域に関する基本的で一般的な情報。

### 〈3－6年生〉

指導の課題は具体的、個人的な身近な状況における外国語コミュニケーションに児童を慣れさせることである。まず、ほとんどの学習時間を口頭コミュニケーションに割り、徐々に書くコミュニケーションを増やしていく。児童は言語や文化の相違に気づき、それぞれの言語や文化が等しい価値があることに気づくようになる。児童は良い言語学習習慣を発達させていかなければならない。

目 標：言語能力

- ・必要に応じて対話者の助けに頼りながらも、個人的で身近な基礎情報を関連付け、基礎的な外国語の日常会話を学ぶ。
- ・日常生活や慣習的な出来事に関するスピーチや文章の中心となる内容が理解できるようになる。
- ・児童が最もわかりやすい状況において、日常生活で必要なこと、あるいは経験したことに関する短いメッセージを書くことを学ぶ。

文化的な技能：

- ・学習言語の文化を理解し、フィンランドの文化との類似点や相違点について基本的な理解を得る。
- ・目標言語の日常生活における特徴的な文化的作法を自然な方法で表現することを学ぶ。

学習方略：

- ・言語学習状況において、自主的かつ積極的に学ぶ。
- ・1対1や小グループでの言語学習を活用する。
- ・教科書、辞書やその他情報を得るための道具を自分の力で使うことを学ぶ。
- ・外国語を発信するときに新しい単語や文構造を使うことを学ぶ。
- ・言語学習において自分の得意分野と苦手分野を認識する。学習目標と関係する自分の学習のあり方や言語技能を評価することを学ぶ。

このように学習指導要領を見ると、「言語能力」や「学習方略」という領域で到達目標が掲げられているように、外国語の実践力をつけさせること、そして自律学習へと導くということが明確に打ち出されている。

「文化」に目を向けてみると、フィンランドの学習指導要領では1、2年生では「異文化への基礎的な導入」とあり、3年生からは「文化的な技能(Cultural skills)」という学習目標の領域が設定されている。文化を技能として捉えることは日本の外国語活動や中学校英語科教育とは方向性が異なるだろう。一方、「学習言語の文化を理解し、フィンランドの文化との類似点や相違点について基本的な理解を得る」という目標は、「自文化・異文化理解」を目標にしているという点で日本の外国語活動の目標と共通しているように思える。また、「コミュニケーションする時に、目標言語の日常生活における特徴的な文化的作法を自然な方法で表現することを学ぶ」という目標については、非言語コミュニケーションや文化特有の表現、言い回しを示していると考えられる。非言語コミュニケーションや慣用表現を学ぶという学習内容としては、外国語活動と相違はない。しかしな

がら、フィンランドの外国語教育では、基礎学校段階からコミュニケーション能力の一領域として「文化」を捉えている。日本では、まず外国語の「興味・関心」を高めるために「文化」を題材にし、いかような角度からでも外国語活動を実践できるようにした方策が採られている。一方フィンランドでは、「文化」は外国語コミュニケーションに必要な「技能」の一つであるといった教育理念が示されている。

#### 4. 教科書に見る国や地域

本研究では、フィンランドで70%以上のシェアを占めるという教科書出版会社 WSOY の『Wow!』シリーズの基礎学校3年生から6年生の教科書(Study Book)を分析対象とする。3年生用は『Wow! 3』、4年生用は『Wow! 4』、5年生用は『Wow! 5』、6年生用は『Wow! 6』という教科書名であるが、以降それぞれをW3、W4、W5、W6と記述することにする。またW3、W4、W6の主人公はクリスという少年で、母親はフィンランド人で父親はイギリス人という設定である。

本研究では「異文化理解」という視点から、どのような「国・地域」のどのような題材、内容を記述しているのかを見ていく。分析結果から、W3からW6を通して「国・地域」の扱われ方を見ると、学年によって大きな違いがあり、そしてフィンランドの英語教育が投げかける異文化理解の方向性が見えてくる。

##### 4-1 W3における国・地域と文化題材の選択

まずW3では「外国」についてほとんど扱われていない。主人公のクリスが夢の中で架空の「アイスクリーム島」において英語を使って様々な異文化体験を行うという内容である。W3では、色、暑さ・寒さ、四季、一日について、好きな食べ物、好きな飲み物、スポーツ、動物等のテーマで3年生の発達段階や年齢に合わせた興味・関心事と基本的な英単語や英語構文を合わせた内容になっている。非常に色彩豊かでファンタジックな絵が多用され、「アイスクリーム島」で繰り広げられる様々な異文化との出

会いが楽しく描かれている。W3は英語の基礎を身につけながら、異文化理解の基礎である「自分のことを表現する」「他者の話を聞く」ことが英語学習の中心に置かれている。

##### 4-2 W4における国・地域と文化題材の選択

W4では、主人公のクリスがロンドン近郊のウィンザーで生活するために渡英したという設定である。4人の仲間ができ、そのうちのローラとエドは非白人のエスニック・マイノリティであるが、詳しい説明はされていない。資料として、67-71ページにはロンドンの写真40枚が紹介されている。写真の題材は表1の通りである。

表1 ロンドンの写真資料 (W3)

観光地	ロンドン塔、タワー・ブリッジ、テムズ川、城、ビッグ・ベン、ロンドン・アイ、マダム・タッソー館
場 所	公園、ホテル、劇場、CD店、教会、カフェ・レストラン、マーケット
乗り物	ロンドン・バス、電車、地下鉄、タクシー、ボート、飛行機
人物等	エリザベス女王、ジェームス・ボンド、ストリート・アーティスト、観光客、犬

さらに資料として、リバプールに住む祖母やマンチェスターに住む叔父に宛ててクリスが送った絵はがきが紹介されている。また、ヘルシンキの同級生への手紙、メール、絵はがきもある。W4でクリスは、イギリス (England) とフィンランドを「結ぶ」役割を果たしていると捉えることができる。

##### 4-3 W5における国・地域と文化題材の選択

W5では、実存するイギリスの中部ノッティンガムシャーのイースト・ブリッジフォードにあるセント・ピーター学校が舞台となる。実際に教科書の筆者が学校の協力を得て、取材を行い、写真を撮影してきて題材化された内容が中心である。しかし、異文化理解という点を見ると、W4はイギリス、主としてロンドンが中心だったが、本書では全体として連合王国 (The United Kingdom) 及びアイルランド共和国について題材化されている。本書では、章の間に「読書コーナー」が設けられ、そこでそれぞれの

国の歴史や事情が簡単に紹介されている。

それでは、連合王国の各国、及びアイルランド共和国についてどのような題材が使用されているかを以下に示す。

読書コーナー 1 (21-23 ページ) :

- ①ウェールズの基本情報 (国旗、人口、首都、言語、国技)
- ②ウェールズの伝説 (海に沈んだ国)

読書コーナー 2 (33-36 ページ) :

- ①北アイルランドの基本情報 (国旗、人口、首都、国技)
- ②北アイルランドの伝説 (巨人が作った橋)
- ③アイルランド共和国の基本情報 (国旗、人口、首都、国技)
  - ・連合王国の一つではない
  - ・バイキングが定住してできた国
- ④アイルランドの伝説 (いたずら好きの妖精と靴屋)

読書コーナー 3 (52-57 ページ) :

- ①スコットランドの基本情報 (国旗、人口、首都、国技)
  - ・民族衣装 タータンチェック
  - ・ネス湖の怪獣
- ②スコットランドの伝説 (霧の中の怪物)

読書コーナー 4 (72-77 ページ) :

- ①イギリスの基本情報 (国旗、人口、首都、国技)
  - ・人物 ウィリアム・シェークスピア、ビートルズ
  - ・ロンドン—国会議事堂、ビッグ・ベン、ロンドン塔、大英博物館、自然歴史博物館、トラファルガー広場
  - ・有名 人—故チャーチル首相、デビッド・ベッカム (サッカー選手)、ロビン・ウィリアムズ (歌手)、故ビクトリア女王、ビーン氏 (コメディアン)、故ダイアナ妃

## ②イギリスの伝説 (ロビンフッド)

このように W 5 では、異文化理解を連合王国の構成国に焦点を当て、展開している。金田 (2005) によると、日本の中学校で英語教科書はアメリカの文化題材が多いとのことだが、それは金田の言うようにアメリカは「日本と密接な関係が続けている」という背景があるだろう。フィンランドの英語教科書では、英語圏としてイギリス、そして連合王国を中心に扱うことは「密接な関係が続けている」ということを必ずしも意味しているわけではないだろう。フィンランド、イギリスは共にヨーロッパ連合の加盟国であり、児童にヨーロッパ市民の一員であることを認識させるということに繋がたいという意図があるのではないだろうか。

## 4-4 W 6 における国・地域と文化題材の選択

W 6 は、世界各地について題材化されているが、設定の仕方に特徴がある。「最高機密課題」を与えられた主人公のクリスが仲間達と世界を旅し、テキストを読み、問題を解決し、そして 9 ヶ月間で答えを見つけたという設定となっている。クリスは最高機密課題を解く仲間の候補者たちの国へ、主にインターネットを通して旅をしていくというストーリーである。

以下表 2 に、クリスがインターネット等を通して交流した国々とその文化題材について紹介する。各課は実際のタイトルではなく、題材の対象となった国と地域を紹介することにする。

表 2 を見ると、第 1 課から第 4 課がオセアニア、第 5 課から第 8 課までが北アメリカ、第 9 課から第 12 課までがアフリカ、第 13 課から第 16 課までがアジア、そして第 17 課と第 19 課に関しては、多文化的な内容、そして第 18 課と第 20 課はフィンランドを学習対象地としている。さらに、各地域のまとめとして「読書コーナー」が設けられ、対象国の様々な情報を学ぶようになっている。「読書コーナー」で提示された文化題材を次の表 3 から表 7 に示す。

読み物コーナーでは、その国々の伝統的、あるいは代表的な文化題材が扱われ、各地域の基本的な情

表2 『Wow! 6』の各課で扱う国と文化題材

課	地 域	国 (地域)	文 化 題 材
1	オセアニア	オーストラリア (ブリスボン)	スポーツ、グレート・バリア・リーフ、夏休みの過ごし方
2		オーストラリア (パース)	アボリジニーの生活
3		ニュージーランド (ウエリントン)	ホーム・ステイ、マウリ人の農園での生活
4		サモア・オーストラリア	サモア人、エアーズ・ロック、オーストラリアの景色と野生動物
5	北アメリカ	カナダ (モントリオール、ケベック)	ケベックでの夏休み、フィンランドとカナダの時差
6		アメリカ合衆国 (サンディエゴ)	ハリウッド・スター、オスカー授賞式
7		アメリカ合衆国	アメリカのスポーツ
8		アメリカ合衆国 (ワイオミング)	北米先住民の歴史
9	アフリカ	ケニア	サファリの野生動物
10		ナミビア	学校生活
11		ナミビア	村の仕事―木の伐採
12		南アフリカ共和国	ズール族、南アフリカの不平等
13	アジア	インド (デリー)	大都会の様子、牛は神聖な動物
14		インド (タミール ナドゥ)	農村の暮らし、ディワリ (ヒンズー教とシーク教の祭り)
15		シンガポール	買い物での注意事項
16		スリランカ	村の雑貨店、村を守った象
17	ルクセンブルグの「グローバル小学校」		
18	EU	フィンランド	
19	課題遂行		
20	EU	フィンランド	子ども達の夏休みの過ごし方

表3 読書コーナー1: オセアニアの文化題材

国	題 材
オーストラリア	グレート・バリア・リーフ、カンガルー、遠隔教育、ブーメラン、ディジャリドー (アボリジニーの楽器)、ウルル (エアーズ・ロック)
ニュージーランド	水上スポーツ、マウリ・ダンス
サモア	入れ墨
* 読み物 (実在の人物クック船長の冒険)	

表4 読書コーナー2: 北アメリカの文化題材

国	題 材
カナダ	国旗の意味、騎馬警察隊、木こり、ケベック州 (フランス語と英語の二言語使用)
アメリカ合衆国	ハリウッド、国旗の意味、自由の女神、アメリカン・フットボール、月面着地、音楽 (ゴスペル、ジャズ、ブルース、ロックンロール、カントリー音楽、ラップ、ヒップ・ポップ)、カウボーイ
* 読み物 北アメリカの民話 (ポール・バンヤンと青牛のペイプ)	

表5 読書コーナー3: アフリカの文化題材

国	題 材
ケニア	マサイ族、観光、健康
ナミビア	野生動物、食べ物、伝統的なナミビアの歌
南アフリカ共和国	黒人と白人、ネルソン・マンデラ、子ども達を救え、アフリカのゲーム
* 読み物 西アフリカの話 (蜘蛛のアナンシ)	



表 6 読書コーナー 4: アジアの文化題材

国	題 材
ア ジ ア 全 般	教育、アジアのゲーム
イ ン ド	ディワリ（光の祭りでヒンズー教、シーク教供に祝う）、タージマハール
ス リ ラ ン カ	象
シンガポール	買い物
*読み物 インドの話（6人の視覚障害者と象）	

表 7 読書コーナー 5: ヨーロッパの文化題材

国	題 材
ヨーロッパ全般	ヨーロッパ、ヨーロッパ連合、ヨーロッパの日、バルト海の国々のフォーク・ダンス、夏季ロック祭典
フィンランド	フィンランドの国土
ルクセンブルグ	ルクセンブルグの位置
ギリシャ	アクロポリス
連 合 王 国	ストーンヘンジ（イギリス）、古城（スコットランド）、サクソン教会（イギリス）、エリザベス I 世（イギリス）
フ ラ ン ス	パリ、エッフェル塔、ボンピドール・センター、ノートルダム寺院、ルーブル美術館
ロ シ ア	セント・ペテルスブルグ、冬の宮殿、エルミタージュ博物館
ス イ ス	アルプス
ノ ル ウ ェ ー	フィヨルド海岸
ス ペ イ ン	ビルバオ市のグッゲンハイム近代美術館、サルバドール・ダリ、パブロ・ピカソ
イ タ リ ア	ピサの斜塔、正月のクラシック・コンサート、レオナルド・ダ・ビンチ
ハ ン ガ リ ー	田舎の美しさ
ド イ ツ	高速道路、ハイキング、キャンプ、トラッキング、
ス ェ ー デ ン	アルフレッド・ノーベル
*読み物 フィンランドの話（7人の兄弟） 1870年にフィンランド語で初めて書かれた物語 作者：アレクシス・キビ	

報を英語で読み取ることが中心となっている。特に表 7 に示したヨーロッパの文化題材は、イギリス、連合王国以外は W4 と W5 とでは扱われて来なかったためか、13 カ国の国の紹介が 6 ページ（85－90 ページ掲載）にまとめて収められている。

#### 4-5 W6 における文化題材の描写の仕方について

これから W6 がそれぞれの文化題材に関し、どのような内容をどのような形で取り入れているかを見ていくことにする。ただしここでは紙幅の関係上、第 2、8、11、12、20 課の文化題材に絞って分析していくことにする。

第 2 課の題材は、「アボリジニーの生活と家族」である。ローズ・ケヌアというバンガローに住んでいるアボリジニーの少女の話を聞くという設定であ

る。課の内容の概略は以下の通りである。

「ローズの住むバンガローに電気は通っているが、母親は家の外で料理をする。その理由は、外で友人、親戚、近所の人と一緒にいる方が良いし、その方が料理がおいしくなるからである。また、家には十分なスペースがないという理由もある。子育ては、親だけでなく村の様々な人が関わる。そのため親戚ではなくとも友達のことを『いとこ』と呼ぶ。家族構成は、祖母、母、妹、いとこ 3 人と候補者ローズ・ケヌアの 7 人。村では仕事がないため父親は都会のパスに出稼ぎに行っている。ローズ自身都会は好きではない」

本書では、現代文化も扱うが、それぞれの地域の先住民族の歴史や生活を題材にしたものが多い。第8課では、「北米先住民の歴史」が題材となっている。北米先住民のクロー族「走る鹿」が北米先住民の立場から、彼らの歴史を教師に紹介している。概要は以下の通りである。

「クリストファー・コロンブスが北米に到着した時、ここはインドであると勘違いしたために先住民はインディアンと呼ばれるようになった。2万年前から北米先住民はアメリカ大陸に住み、600以上の種族があり、皆が自然を愛していた。1620年以降ヨーロッパから移民が訪れ、アフリカからの奴隷も連れてくるようになった。最初は移民を脅威と感じなかったため親切に手助けしていた北米先住民は、移民が銃や多くの問題を持ち込んだことで助けたことを後悔するようになった。そして、19世紀、20世紀には世界中から移民が来たため、北米先住民は土地を奪われ、特別保留地に住むようになった。しかし、北米先住民は素晴らしい文化を持っていた」

アボリジニーのローズやクロー族の走る鹿も今は、それぞれの国のエスニック・マイノリティとなっている。ローズはアボリジニーとしての大家族制や地域密着型の生活に満足し、価値を見いだしている。また、走る鹿は祖先の歴史と文化に誇りを持っている。特に近年増加しているフィンランドの移民の子どもたちにも肯定的な自己アイデンティティが示せるモデルとなるだろう。

第11課ではナミビアの「村の仕事」という題材が扱われている。サムという少年の父親が2年前に他界したため、サムは学校に通うことより母親の手伝いを優先しなければならないという設定である。「サムの村では、村中で伐採をしていたため、その手伝いで2週間学校を休んでしまった」ということをサムが教師にしている話である。

内容としては、父親が他界、伐採の手伝いで学校に行けないといったマイナス要素が全面に出ているのにも関わらず、その描写のされ方はある意味「日

常的」と言える。つまりサムは「可哀想である」「子供なのに苦労している」と思われる対象として描写されていない。母親を支えることや伐採の手伝いのために学校を休むことはごく「当然」なことであるというメッセージが伝わってくる。そういった意味では、このような題材の描写の仕方は、松畑（2002 p.78）が「英語を学ぶ意味も、『異文化に等距離を置く』という観点からも考えなければならない」と指摘していることを反映させていると言える。実際に、フィンランドの学習指導要領にも「それぞれの言語や文化に等しい価値があることに気づかせる」という目標が掲げられている。第2課、第8課、第11課は、この学習指導要領の目標が教科書に反映されていることを示している。

一方、自国の現状について疑問を投げかけている内容もある。第12課は、南アフリカ共和国の「ズール族について」が題材である。ズール族のエスタが国連でスピーチをするという設定である。スピーチの概要は以下の通りである。

「ズール族と言えば、槍と盾を持った背の高い戦士を思い浮かべる人がほとんどだろうが、今そのようなズール族の人間はいない。南アフリカの多くのズール族男性は重労働で低賃金という状態で生活している。エスタの父親や叔父は炭坑で暮らしながら働いている。帰宅できるのは1年に、2、3回である。南アフリカは、貧富の差、白人と黒人の差、都会と田舎の差があり、どこへ行こうと『不平等』であることがわかる。南アフリカの最初の黒人大統領であるネルソン・マンデラは素晴らしい人である」

そして、最後にエスタ自身が最初の女性大統領か、国連総長になりたいと表明し、スピーチを終えている。南アフリカの小学生が自国の黒人の厳しい現状を世界に向かって訴えるという設定は、フィンランドの子ども達の心にどのように響くのだろうか。

最後の第20課は「多文化」への認識を深めさせる内容が扱われている。小学校生活も後残り2週間という設定で、子ども達が先生と夏休みの過ごし方に

表 8 夏休みの過ごし方 (W 6)

子供の名前	行 き 先	過 ご し 方
ペー ター	ラップランドのサラ (祖母の出身)	鮭釣り、湖で泳ぐ、山でサイクリング、夜更かし
サ マ ン サ	アメリカのニューヨーク (父親の出身) ディズニール ランド、グランド・キャニオン	ドライブ
ア ル	トルコ (父親の出身)	父親の家族と一緒に、海岸
ア メ リ ア	スウェーデンのウップサラ (フェリーで)	サッカーのキャンプに参加

ついて話をしている。子ども達の夏休みの過ごし方を上記の表 8 にまとめる。

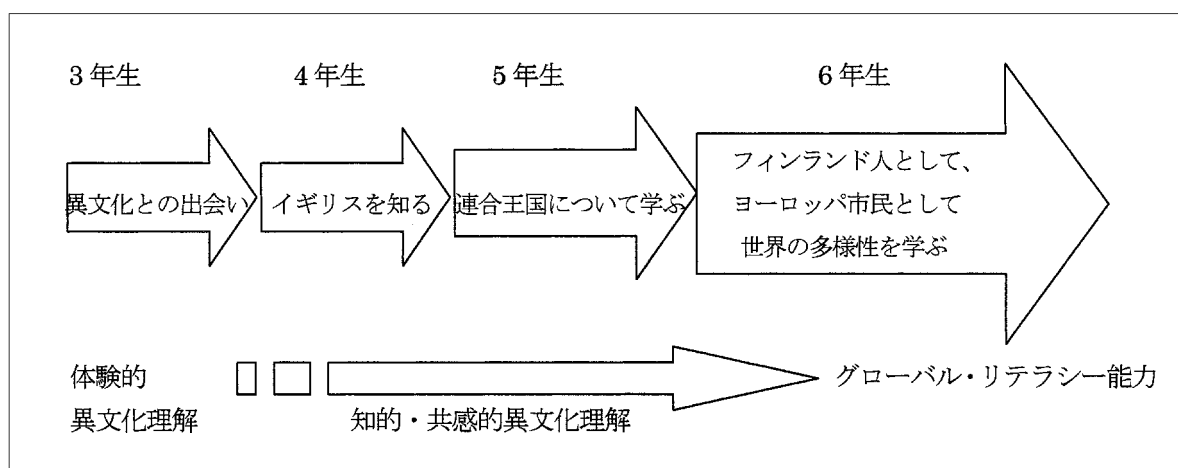
表 8 から、フィンランドの小学生のエスニシティに関する多様な背景が理解できるだろう。ペーターの祖母はフィンランドのサーミ族であることが推測できる。また、サマンサは父親がアメリカ人、アルはトルコからの移民 2 世である。夏休みも様々な国へ行き、様々な過ごし方をするという描写によって、子ども達の「多様性」が強調されている。第 2 課、第 8 課では外国のエスニック・マイノリティの子供が抱く自己・自文化に対する肯定的な態度を示していた。第 20 課では、移民そして二文化共存家庭の子ども達を包摂的に扱った描写だと言えよう。WSOY 社の Seppovaara 氏によると本シリーズは、フィンランドの移民の子供達がフィンランドの学校に慣れるようにという意図を含んで制作されているそうである。

## 5. まとめ

これまで小学校英語教科書『Wow! 3』から『Wow! 6』を分析した結果をまとめると、以下の図で示されるような異文化理解へのアプローチが見られた。

3 年生では、「異文化との出会い」が五感を通して学べるように構成されている。架空の異文化世界に身を置きながら、自分の日常生活、自分の好きな物・ことについて簡単な英語で表現することが中心となっている。疑似体験ではあるが、「体験的異文化理解」が英語教育を通して行われるようになっている。4 年生では、イギリスの小学生との交流を疑似体験しながら、ロンドンを中心に英語圏の文化について学ぶという知的理解が促されている。5 年生では、同じくイギリスの小学生との交流や学校生活を疑似体験する。そして、対象国はイギリスから連合王国に広がり、「英語が背負っている文化」(松畑 2002)を

図 Wow!シリーズにおける異文化理解へのアプローチ



知的・共感的に学ぶための題材が扱われている。そして、6年生ではグローバル・リテラシーを高めるような文化題材が扱われている。グローバル・リテラシーとは、「情報を瞬時に自在に入手し、理解し、意思を明確に表明できる『世界へアクセスする能力』『世界と対話できる能力』」(「21世紀日本の構想」懇談会, 2000, p.31)と定義できる。松畑(2002)はさらにこの能力の基本を①コンピュータやインターネットといった情報技術を使いこなせること、②国際共通語として英語を使いこなせることと示している。W6ではインターネットを通じた世界の子供達との英語コミュニケーションの場面が中心であるため、まさに設定としてはグローバル・リテラシーを高めるための教科書になっている。

異文化題材の対象国や地域を見ると、ヨーロッパについてはイギリスや連合王国が中心となっているが、その他オセアニア、北アメリカ、アフリカ、アジアの文化題材は扱われた量にも描写の仕方にも偏りがほとんど見られない。そして、最後の第20課で改めてフィンランド国民の多様化について、移民や二文化共存家庭の子供たちを包摂的に扱った内容描写を提示しているところに、フィンランドにおける小学校英語科教育の着地点を見いだした思いである。

日本の新学習指導要領では、外国語活動について「日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと」という内容が提示されている。フィンランドの教科書分析結果では、「行事」についてはほとんど扱われていなかった。また、フィンランドを文化題材にしたものの自体が少なく、フィンランドと外国の生活、習慣、行事の比較は明示的には扱われていなかった。つまり、フィンランドでは、日本の学習指導要領にあるような、自国文化を中心に置いて「外国との違い」を学ぶという形の異文化理解教育が少なくとも教科書の中心に置かれていないのかもしれない。

本研究は、フィンランドの小学校基礎科目としての英語教科書を1種類のみ、しかも「異文化の描写」に焦点を当てて分析したものである。つまり、

フィンランドの英語教育の一部を切り取って分析した研究にすぎない。また、必修化が決まったばかりの日本の外国語活動と、小学校6年レベルで既に児童の知的レベルに合った情報を英語で読み取る力をつけさせているフィンランドの英語教育とを比較することは妥当ではないだろう。しかし「異文化に等距離を置く」こと、そして「自国の多様性」に目を向けさせるというフィンランドの基礎学校における英語教育のアプローチは、日本の外国語活動に取り入れる必要があると言えるだろう。

#### 〈注〉

- (1) 2007年10月7日に行った北川達夫氏への聞き取り調査から。
- (2) OECD(経済開発協力機構)が1988年から始めた事業で、義務教育を終了した15歳の生徒を対象に「数学的リテラシー」「科学的リテラシー」「読解力」を主要三分野として測定した学習到達度調査。これまで2000年、2003年、2006年と3年ごとに実施されている。フィンランドは実施された3回の調査でいずれの分野も世界トップレベルであった。
- (3) ETS(2005). Based on non-native English-speaking examinees by native country, based on 554,942 examinees who took the test between July 2004 and June 2005.
- (4) 文法的な意味を持つ接辞(格助詞、活用語尾など)が実質的な意味を持つ語(名詞や活用語の語幹)に連結している言語。
- (5) 日本の小学校・中学校に相当する。7歳から15歳まで9年間義務教育として基礎学校で学ぶ。
- (6) [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/gai.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/gai.htm)(文部科学省 新しい学習指導要領 参照 2008年8月10日)
- (7) <http://www.opf.fi/english/page.asp?path=447,27598,37840,72101,72106>(参照 2008年8月5日)

付記：本稿は平成19年—20年度科学研究費補助金(萌芽研究)(課題番号19652052)

「国語科教育から小学校英語活動への統合的アプローチの開発研究」研究代表者：清水武雄(群馬大学教育学部・教授)の研究成果の一部である。

謝辞：本研究を行うにあたり、フィンランドの教育事情に関し、ご指導いただいた北川達夫先生(日本教育大学院客員教授)、そして英語教科書の分析にご快諾くださったWSOY社のSeppovaara氏(開発部長)に対し、感

謝の意を表したいと思います。

#### 〈分析教科書〉

Westlake, P., Aula, T. and Turpeinen, E. (2002) *Wow! 3 Ice-cream Island*. WSOY

Westlake, P., Aula, T. and Turpeinen, E. (2003). *Wow! 4 The Dream Team*. WSOY

Westlake, P., Aula, T., Kuja-Kyyny-Pajula, R. and Turpeinen, E. (2005) *Wow! 5 The Famous Four*. WSOY.

Westlake, P., Aula, T., Kuja-Kyyny-Pajula, R. and Turpeinen, E. (2006) *Wow! 6 Top Secret*. WSOY.

#### 〈参考文献〉

鏡味明克 (1991) 「フィンランドの二国語使用とフィンラ

ンド国立国語研究所」『三重大大学教育学部研究紀要』第 42 卷、人文・社会科学、1-10

金田尚子 (2005) 「日本の中学校英語教科書に見る異文化理解：題材の観点からの教科書分析」龍谷大学『英語英米文学研究』第 33 号、129-149

駐日欧州委員会代表部 (2005) 「Europe Summer 2005」

「21 世紀日本の構想」懇談会 (2000) 『日本のフロンティアは日本の中にある－自立と協治で築く新世紀』講談社

保坂裕子 (2006) 「フィンランドにおける学校と教育システム改革－活動理論的分析－」山住勝広 (編) 関西大学人間活動理論研究センター『CHAT Technical Reports』No.2、79-92

松畑熙一 (2002) 『英語教育人間学の展開』開隆堂

吉田欣吾 (2007) 「フィンランドにおける言語教育」『東海大学紀要文学部』第 87 輯、59-78